

小説 「理髪師チッタアライン」

藤田 稔

私が憧れの旧制松山高等学校理科に入学したのは昭和22年(1947)4月、17歳の時であった。松山市は四国最大の観光都市であり、松山城は朝日に映えて輝き、道後温泉はいつも暖かい湯気が立上っていた。先輩のお世話で、道後温泉に近い長谷川さんというお家に下宿させて頂くことになった。学校まで徒歩10分という最高の環境であった。

終戦後間もないせいか、同級生には陸軍士官学校や海軍兵学校かえりの生徒が多く、中学4年終了(4修、飛び級)で入学した私はクラスで一番若く(17歳)みんな兄のように思えた。

私は理科1組(50名)に配属された。授業が始まって驚いた事は、中学校とは異なり、授業内容のレベルの高さとスピードの早さであった。学期試験は数学、物理、化学、英語、ドイツ語、動物、植物、国語と8科目について年2回行われ、1科目でも60点以下があると落第となる。

私は一番年下で勉学のキャリアが足りないことを自覚しており、猛勉強を行った。松高理科4クラス合計200名中、3年間首席をとったのは、親友板垣 宏君で、京大に進学し、帝人(株)に入社して、めきめき頭角を現し、社長、会長まで登りつめた。私の生涯で板垣宏君ほど頭脳明晰で、勉

強家で、努力家で誠実な人を知らない。私は200名中8番であった。一番年下なのによくこれほどの成績がとれたものと自分を褒めてやりたい。松高3年間の生活は私の長い人生(現在 95歳)の中で最も楽しく、有意義なときであった。

昭和23年(1948)7月であった。秋の松高記念祭にわが理科1組も演劇を上演しようということになり、当時のドイツ語の教科書 ヘッベル作「理髪師チッタアライン」に白羽の矢が立った。総代の岩村昇が「藤田君、君は演劇部だからひとつ音頭をとってくれないか」と言った。私はなにか熱いものが湧いてくるような、創造への身震いのようなものを感じた。

新居浜市の実家で夏休み中かかってこの短編小説を翻訳して、脚本を書き上げた。クラスメートの早坂暁に見てもらうと、「なかなか良く出来ている」と褒められた。

これはドイツのある片田舎の物語である。熱病によって愛する妻を失った理髪師チッタアラインはやがて娘のアガーテに妻の面影を見いだし、偏愛するようになり、二人だけのおだやかな日々が続いていた。そこへ若い職人レオンハルトが住むようになり、さざ波が立ち始める。独占欲の強い父親はアガーテのレオンハルトに対するちょっとした仕草もとがめ、ことごとにレオンハルトに当たり散らす。レオンハルトは何度も出てゆ

こうとする。しかし、アガーテに惹かれてそれもならず、いつしか二人は愛し合うようになった。チッタアラインはだんだん狂気へと昂じてゆく。

ある嵐の夜、一人の老婆が宿を乞いに来て泊まり、トランプ占いをした。そしてアガーテが美しい花嫁になることを予言した。チッタアラインは家出をして行方をくらました。丸一年ののち、若い二人は教会で結婚式を挙げた。いまは乞食になり果てたチッタアラインが風琴弾きの歌う歌にボロボロ涙を流す姿がみられた。

平和	平和
あわれ	疲れしものに
いかばかり	甘きひびきよ
いまして	名だに呼べば
いまして	かそけき足音
きこえる	心地す

そして、ある夜チッタアラインは家に帰ってきた。アガーテを連れだそうとして、レオンハルトを認めると、「父と子の聖霊の名において命じる。悪魔よ立ち去れ」と叫んだ。しかし、二人の愛の結晶の子供を見て、チッタ

アラインの錯乱は極限に達した。彼は気を失って棒のように倒れた。

九月に入り、新学期が始まると、みんな真っ黒に日焼けした元気な顔を見せた。岩村昇と私が相談して配役とスタッフを決めることになった。演出は藤田稔、牧師は岩村昇、レオンハルトは純朴な青年 福島一郎、老婆はいつも「アルルの女」を吹奏している田中昭とスラスラときまった。

このドラマは悲劇ドラマであり、主人公のチッタアラインによって成否がきまる。理科一組の中を見渡したところ、早坂暁以外いないという結論に達した。彼には内に秘めた情熱をニヒルな表情で抑えているようなところがあり、天性の役者みたいなところが感ぜられた。はたして彼はチッタアライン役を見事に演じてこのドラマを成功に導いた。娘役のアガーテは岩村昇(クリスチャン)の知人のお嬢さん、金井玲子と決定。放課後の教室におずおずと現れた金井玲子の清楚な美しさに理一のメンバーは完全に魅せられた。

演劇の練習は放課後は教室や食堂で行い、土、日は岩村昇の通うキリスト教会をお借りして行った。放課後の教室のあちらこちらから演劇練習中のモリエール作「守銭奴」のアルパゴンの怒鳴る声や、ツルゲーネフ作「初恋」の美しいジナイーダのすすり泣く声が聞こえてくるのであった。

当時の松高の演劇熱はものすごく、秋の記念祭の演劇コンクールには

文科、理科、寮生らによる演劇が毎夜三日間にわたって合計9本も上演されるという盛況で、戦後間もない時期で、ほかに娯楽のない松山市民が押しかけてきて、毎夜章光堂(講堂)は超満員になるのであった。

理科一組の演劇「理髪師チッタアライン」は猛練習の末、明るい一筋の光が見え始めた時、もう公演の日は近づいていた。

そして、遂に記念祭の日が来た。忘れもしない昭和23年(1948)10月15日である。その朝はなんと打ち震えるような、そして輝かしい朝だった事であろう。もやに包まれた松高校庭にひとすじの陽がさし、黒いマントの若人が三々五々つどいく。瞬時にしておおらかな太陽はその姿を現し、遙か城山の白壁に反射した。紅葉が松山城を浮き彫りにし、眼を転ずると古代ローマ風な松高講堂(章光堂)がどっしりと重量感を持ってせまって来た。こうして伝統ある記念祭の幕はあき、華ともいうべき演劇祭が三日間にわたって繰り広げられた。

「理髪師チッタアライン」は第一日目に上演された。「子供か、永遠の造化よ」乞食姿のチッタアライン(早坂暁)はアガーテ(金井玲子)の抱いている赤ん坊をのぞきこんだ。「ほかの子供たちと変っちゃいない」チッタアラインは低い陰気な調子でつぶやいた。それはしんとした講堂に妙にうつろに響いた。次の瞬間、彼は狂気のように叫んだ。

「目の中に地獄の火が燃えているわけでも無い。悪魔のような顔つきでも無い。そして子供は神から授かるものだ。一体おれは気が狂っているのだろうか。そうだ。そうだ。おれは狂っている。あの婆さんもそういついたじゃ無いか。おれを精神病院へ連れて行ってくれ」気を失って彼は棒のようにバツタリ倒れた。

「アガーテ」とレオンハルト(福島一郎)はかけよると彼女を強く抱いた。「レオンハルト」とアガーテはくずれおちそうになるのを必死でこらえ、二人は倒れた老人に見入った。一瞬彫像のようになった。「理髪師チッタアライン」劇は終わった。幕だ。その瞬間、松高講堂をゆすぶるような拍手が沸き起こった。それは溢れて窓から外へ、そして美しい星のきらめく夜空へと吸い込まれていった。

「素晴らしかったわよ、藤田さん」と演劇「若き日の啄木」で主演の私の妻役を演じた松崎礼子が祝福してくれた。「ダンケ・シェーン」と私は答え、彼女と固い握手をかわした。

演劇部公演の「若き日の啄木」の主演抜擢と、「理髪師チッタアライン」の脚本、演出の成功。私はなんと幸せ者であろうか。10月18日にみんなそれぞれあるだけの材料を持ち寄って、田中昭の下宿でスキヤキコンパをして、慰労会を行った。無邪気にも私たちは、ジェスチャーをしたり、二十

の扉をしておおいに笑った。金井玲子は「道後の猿」をあてられて、真っ赤になりながらも、名演技を披露した。

そのあと岩村昇が城山に登ろうと言い出した。衆議一決、高下駄をぬいで裸足で城山にかけ登った。晩秋の冷気が身を包み快い。満月がかかっている。みんな肩をくんで寮歌を歌った。やがてそれは高まりストームになった。金井玲子もストームの輪に入った。踊りながらみんな泣いた。大役を果たしたという達成感から出た嬉し涙だ。

早坂暁が叫んだ。「松高ユーパーアーレス、万歳」みんな唱和した。私は松高スピリッツを想う。みんなで讃えようあの過ぎにし日々を。城山を照らす月の光の中で、私たちは肩を組んで、いつまでも一番好きな寮歌「若葉の古城」を歌い続けるのであった。

若葉の古城

若葉の古城登り来て	空しく更くる青春を
我が声低く誦(ず)する時	想いは遠きふるさとの
御空にひかる星七つ	啓示(さとし)の色に冴(さ)ゆるかな

岩村昇、早坂暁、藤田稔3人の友情は固く結ばれ、生涯続いた。岩村昇と早坂暁は天国に旅立ったが、私は二人の偉大な功績を後世まで伝えるべく、広く報道して行きたいと思っている。

◆岩村 昇(1927－2005)愛媛県宇和島市出身。

1954年鳥取大学医学部卒業。日本キリスト教海外医療協力会(JOCS)からの派遣ワーカーとして1962年ネパールに赴任。以後18年間、結核、ハンセン病、マラリア、コレラ、天然痘、赤痢などの伝染病の治療に専念し、また栄養改善のために史子夫人と共に活躍し、「ネパールの赤ひげ」と呼ばれた

(主要著書)

- 1, 「みんなで生きるために」今井出版(1965)
- 2, 「山の上にある病院」新教出版社(1965)
- 3, 「ネパールの赤ひげは語る」岩波ブックレット(1983)
- 4, 「ネパールの碧い空」講談社(1983)
- 5, 「ネパールの人々と歩んだ医師」日本キリスト教団(2013)

(受賞歴(主なもの))

- 1, 神戸医科大学より医学博士受領(1957)

- 2, 神戸大学医学部教授就任(1980)
- 3, 第1回ロータリー国際理解賞(1981)
- 4, 吉川英治文化賞(1973)
- 5, 国際交流基金賞(1988)
- 6, 毎日国際交流賞(1991)
- 7, マグサイサイ賞(公共奉仕部門)アジアのノーベル賞ともいわれる。
(1993)
- 8, 第4回環境水俣賞(1995)
- 9, 外務大臣賞(1996)
- 10, 神戸新聞社賞(2001)
- 11, 井植文化賞(2011)
- 12, 医療功労賞(2015)

◆早坂 暁(1929－2017)愛媛県北条市出身。

1955年日本大学芸術学部演劇学科卒業。脚本家・作家。

(主要作品)

- 1, 「花いちもんめ」大和書房(1982)
- 2, 「夢千代日記」大和書房(1983)

- 3, 「空海」大和書房(1984)
- 4, 「新夢千代日記」大和書房(1984)
- 5, 「天下御免」大和書房(1986)
- 6, 「ダウントOWN・ヒーローズ」新潮社(1986)
- 7, 「花へんろ」大和書房(1986)
- 8, 「華日記」新潮社(1989)
- 9, 「公園通りの猫たち」講談社(1989)
- 10, 「山頭火」日本放送出版協会(1989)
- 11, 「きけ、わだつみの声」春秋社(1996)
- 12, 「源氏物語」恒文社(2001)
- 13, 「花へんろ 風の巻」文芸春秋社(2004)
- 14, 「戦艦大和日記 総集編」勉誠出版(2006)

(主要な受賞歴)

- 1, ギャラクシー賞(放送批評家賞)(1968)
- 2, 芸術祭賞 優秀賞(1978)わが兄はホトトギスにて
- 3, モンテカルロ国際シナリオ賞(1979)修羅の旅してにて
- 4, 文部大臣賞(1979)著書、脚本における活動に対して
- 5, NHK 放送文化賞(1982)夢千代日記などに対して

- 6, 向田邦子賞(1985)花へんろにて
- 7, 講談社エッセイ賞(1990)公園どうりの猫たちにて
- 8, 新田次郎文学賞(1990)華日記にて
- 9, 放送文化基金賞(1991)女相撲にて
- 10, 紫綬褒章(1994)
- 11, 勲4等旭日小授章(2000)

◆藤田 稔(1930—)愛媛県新居浜市出身。

1953年大阪大学工学部応用化学科卒業。昭和石油、昭和シェル石油 研究部長、富士シリシア化学技術顧問。現在、石油分析化学研究所 研究所長 工学博士(大阪大学) 技術士(化学部門)

(主要技術図書)

- 1, 舟阪渡、藤田稔他「燃料分析試験法」南江堂(1968)
- 2, 舟阪渡、藤田稔他「石油機器分析の実際」南江堂(1972)
- 3, 桜井俊男、藤田稔他「石油製品添加剤」幸書房(1986)
- 4, 藤田稔他「潤滑剤の実用性能」幸書房(1980)
- 5, 藤田稔他「潤滑グリースと合成潤滑油」幸書房(1984)
- 6, 藤田稔「石油分析化学」石油分析化学研究所(1992)

7, 藤田稔「燃料油、潤滑油および添加剤の特性と分離分析技術」

技術情報協会(1996)

8, 藤田稔「燃料油、潤滑油および添加剤の基礎と応用」サイエンス&

テクノロジー(2008)

9, 藤田稔「燃料油、潤滑油、グリース、添加剤の基礎と添加剤の

分離分析方法」サイエンス&テクノロジー(2016)

(主要小説著書)

1, 藤田稔「愛と青春の追憶」東京図書出版会(2004)

2, 藤田稔「人生は90パーセントが運」「研究と愛は永遠に」

東京図書出版(2017)

(主要な受賞歴)

1, 大阪大学・工学博士(1962)「液体クロマトグラフィーによる

石油分析法の開発」 船久保 英一教授 主査

2, 石油学会論文賞(1973)「石油類の分析法の開発および流動点

降下剤の新合成法の開発、化学構造と作用機構の解明」

3, 石油学会功労賞(1988)石油学会創立30周年にあたり、この間、編

集幹事、企画委員、運営委員を担当し、会員の増加、会の発展に寄

与した。また、学会発行技術図書の企画、編集、執筆を行った。

- 4, 石油学会学会賞(1994)「潤滑油、添加剤の分析法の開発および脱金属触媒の発見」 会長 桜井 俊男 教授 主査
5. 日本科学技術情報センター(JICST)永年翻訳功労賞(1991)毎月発行される世界の石油関連雑誌(英語、ドイツ語論文)の主要なものを翻訳して150字の日本語に抄訳する業務を20年間実施した。
- 6, 科学技術庁・技術士(化学部門) 1回で合格。倍率 10倍。
- 7, 日本油化学会功績賞(2004) 理事、編集委員、企画委員を長くつとめた。また、海外の石油関連技術論文の抄録を30年間継続した。
- 8、日本トライボロジー学会功績賞(2005) 会誌に多くの論文を投稿、掲載された。理事、編集委員、企画委員を長くつとめた。潤滑油、グリース、添加剤に関するセミナーを毎年実施した。また、潤滑油関連技術図書を多く出版して、トライボロジーの重要性を広く世に広めた。
- 9, 日本技術士会会長賞(2006) 審査には、発表論文数、講演会数、出版図書数がきめられており、これらをすべて突破しなければいけない。現在、受賞者数は少ない。
- 10, 大阪大学工学部化学系同窓会会長賞(2009) 卒業生は数千名いるが、特に優れた研究開発、技術開発を行ったものに毎年1名ずつ授与される。

11, 大阪銀杏技術士会会長(2012－2024)阪大卒技術士の会。

関東、関西に幹事がいて毎年、講演会、見学会、懇親会を行っている。

入会費、年会費、無料。会員数約100名。大阪大学、大阪大学工業会に協力している。

(技術士としての社会貢献)

海外業務

1, アルジェリア(1975) オラン市より潤滑油研究所建設の技術指導

依頼があり、約1ヶ月出張した。研究所敷地、建物の配置、排水、排

ガスの処理設備、エンジン室、機器分析室、一般分析室の配置、

機器分析装置の選定、予算措置、日本および現地における研修期間、

研修研究所、宿泊所、人数などについて具体的に情報交換した。

2, 韓国(1983)ソウルの石油会社より、潤滑油の製造工場を建設した

いので、技術指導の依頼があった。建設の方は日揮または千代田に

任せることとして、潤滑油の製造方法、潤滑油の種類と特性、潤滑油

の試験、分析方法、添加剤の基礎と応用、グリースの製造方法など

について指導した。(約 1か月)。講演はすべて英語で行った。大変

感謝された。

3, カナダ(1985)国家プロジェクト「カナダ・オイルサンドよりクリーンな

燃料油の製造開発研究」のためカナダの政府、現地、工場、研究所を訪問して情報交換した。日本に帰り、カナダで発見したいくつかの問題点を改良した。その結果、ガソリン収率が10パーセント高く、コークス生成ゼロのプロセスを開発し、また V、Ni を効率よく回収する脱金属触媒を発見した。わがプロセスはまだ工業化はされていない。

（約 1か月 出張）

- 4, 中国（1990） 中国海南島政府より、産出は多いが有毒で食べられないキャサバいもの活用について相談を受けた。検討の結果、皮をむいて粉碎し、ドロドロの水溶液として、発酵法によりアルコールに変換できないかと回答した。収率は低いがアルコールが生産された。

実験、生産に協力した。（1か月 出張）

- 5, 台湾（1995） 自宅に台北大学および中国石油より技術指導の依頼状が届いた。大学では「燃料油、潤滑油、グリース、添加剤の基礎と応用」について英語で講演した。大学教授に夕食会に招かれたが日本語が上手で、ほとんど日本語で会話した。幼いころ学校で日本語を学んだそうである。私は申し訳ない気持ちであった。次に嘉義市にある中国石油潤滑油研究所を訪問して「燃料油、潤滑油、グリース、添加剤の基礎と応用および機器分析方法、分離分析方法」について

英語で講義した。受講研究員は20名でみんな優秀で質疑応答もすべて英語で行った。(1か月 出張)

- 6, 中国(2006)瀋陽市において国際人材交流大会が開催され、出席して日本技術士会の広報、宣伝を行った。また大連市において自動車工場、陶磁器工場を訪問して情報交流と技術指導を行った。

(1か月 出張)

(国内業務(2000－2026))

- 1, A 社 大学卒新入社員に「燃料油、潤滑油、グリース、添加剤の基礎と応用および添加剤の分離分析法」について講義を行ない、また実験指導も行った。現在会社で使用中の潤滑油を改善して生産能力を大きく向上した。会社にも認められ担当社員は社長賞に輝いた。
- 2, B 社 大学卒新入社員に「燃料油、潤滑油、グリース、添加剤の基礎と応用および添加剤の分離分析法」について講義を行い、また実験指導もおこなった。現在会社で使用中のグリースを改良して生産性を著しく向上させることに成功した。会社にも功績を認められ、大学院博士課程への入学を許可され、グリースの研究をさらに進展させて担当社員は工学博士を取得した。
- 3, C 社 潤滑油、グリースの分析専門会社の技術顧問として、毎年

入社してくる新人に対して、「燃料油、潤滑油、グリース、添加剤の基礎と応用」について講義を行っている。最近は自動測定装置が増えているので、そのもととなる原理、原則を学習することは非常に重要と考えられる。

岩村昇、早坂暁、藤田稔の友情は永遠である。演劇「理髪師チッタアライン」の上演に当たっては、出演者はもちろん、舞台装置係、衣装係、メイク係、照明係、音楽(レコード)係など多くのクラスメートが協力して下さった。心からお礼申しあげる。最後にクラスメートの全体写真を次頁に示す。

(完)

2026年8月1日

石油分析化学研究所 研究所長

工学博士(大阪大学) 技術士(化学部門)

藤田 稔



最前列 右端 河野義邦

同 右から3番目 田中 昭

同 右から4番目 藤田 稔

同 右から6番目 岩村 昇

最後列 右から4番目 早坂 暁

中央背広の方 石本 岩根 先生

写真 29回松高理科3年1組(昭和24(1949)年7月撮影)